

発展に影響を与えた駅

駅の整備により、逗子市は別荘地や海水浴場として発展していきました。

逗子駅



昭和30年頃の駅で、明治22年、横須賀線開通時に開設されました。駅左手には貴賓室があり、駅前ロータリーは平成7年まで、憩いの場として市民に親しまれました。

東逗子駅



昭和27年開設当時の駅です。沼間・桜山青年会から、沼間にも駅を開設しようと呼びかけられます。計画時「沼間駅」と名付けられていましたが、国鉄との交渉の末、「東逗子駅」となりました。

湘南逗子駅



昭和60年に海水浴客の混雑解消のため、8両編成の車両が乗り入れられるよう逗子海岸駅と統合され、今の駅になりました。

神武寺駅



昭和36年頃です。湘南電気鉄道逗子線が開通した翌年の昭和6年、現在より約300m六浦駅寄りに開設。昭和19年9月1日、現在地に移転されました。

逗子海岸駅

湘南逗子駅と約400mしか離れていない場所(現在の新逗子駅南口辺り)に開設され、昭和23～60年の37年間使われていました。隣には映画館がありました。



「思い出」が詰まった古い写真をコミュニティづくりのきっかけに



写真を残す意義や活用の可能性について、PHP総研主席研究員の亀井善太郎さんに伺いました。

PHP総研主席研究員
立教大学大学院特任教授
亀井善太郎さん

古い写真はこの地に生きる「思い出」の宝庫

見慣れたはずの建物やお店も、取り壊されると何があったか忘れてしまう。こんな経験誰でもあるでしょう。でも、当時の写真を見れば、「そういえばここには魚屋さんがあって、おばあちゃんの話は面白かった」、「当時は襟が大きい服が流行っていたな」と、過去の「思い出」が次々とよみがえります。写真を残す意義はそこにあると思います。風景はもちろん、日々の暮らしの写真も大切です。何気ない一コマだからこそ、年月を経ても以前の様子を知る資料にもなります。はやりのファッション、古い道具、自動販売機の商品など、一枚の写真からいろいろなことが見えてきます。「地元」とはそれぞれの思い出が詰まった場所。〇〇さんとよくここ

で遊んだ、この自転車屋さん手品みたいに直してくれた、など、小さな思い出の積み重ねが地元愛につながります。大切な思い出だからこそ、きれいなままであってほしくて、道にあるごみを自然と拾う。写真はそんな素敵なサイクルを生むきっかけになるかもしれません。

思い出の共有をコミュニティづくりに活かす

先祖代々住んでいる旧住民と最近越してきた新住民の融和は、どの地域でも課題です。その解決方法の一つに写真の活用があります。一枚の写真を共に見ながら「子どもの頃、ここでよく自転車の練習をしていたよ」「あら、私もそうです。車も来ないし、ちょっとした坂道で、練習にぴったりですよ」と、それぞれの思い出を共有できると心の垣根が融けていき

ます。この地の思い出は、人それぞれ多様でかけがえのないもので、フラットな関係の気付きにもつながります。

多世代の交流にも役立つでしょう。例えば逗子フォトから写真を何枚かプリントアウトして地域のお年寄りに話を聞く場を設けてみる、写真展を開いてみるのはいかがでしょうか。子どもからお年寄りまで、いろいろな年代が集まるきっかけになります。集まれば話すきっかけとなり、お互いに話せば、それぞれの世代の考えや暮らしの理解が深まります。写真にそれぞれの思いを書き込むのもよいかもしれません。そうやって地域への思いが形になっていくのです。

コミュニティづくりは一日にしてならず。古い写真を、人が交わるきっかけに使ってみてはいかがでしょうか。

逗子フォト展 開催

昔の写真を見て懐かしんだり、今の写真を見て逗子の魅力を再発見したり。パソコンやスマートフォンなど、画面で見るとは一味違った感動があります。

時 1月26日(金)～2月2日(金)
9:00～16:00
*(土)(日)は除く。
場 市役所1階市民ホール



銀座通り入口交差点から



逗子通り(現新逗子通り)。ヒツジヤは今も続く店の一つ

